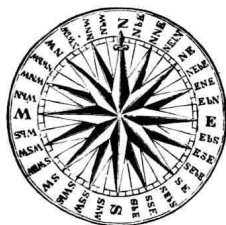


かぼちゃ戦争

はまみつを・著 石津博典・絵





偕成社の創作文

か　　ぼ　　ち　　や　　戦　　争

NDC 913 偕成社 212P 21cm 1980年

~~~~~  
発　行　1980年12月　初版第1刷

---

|      |   |   |   |   |   |
|------|---|---|---|---|---|
| 著　　者 | は | ま | み | つ | を |
| 発行者  | 今 | 村 |   |   | 廣 |

---

発　行　所      株式会社    偕            成            社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260-3221(代)                      〒162

振　替　東京　5-1352番

本文印刷      新興印刷製本株式会社

多色印刷      小宮山印刷株式会社

製　　本      文勇堂製本工業株式会社

~~~~~  
落丁本・乱丁本はおとりかいたします。

8393-720350-0904

©はまみつを 石津博典 1980

Printed in Japan

かぼちゃ戦争

はまみつを 著／石津博典 絵



夏の空に
たった 一機の
飛行機しか
こなかった村にも、
やっぱり
戦争はあったのだ。



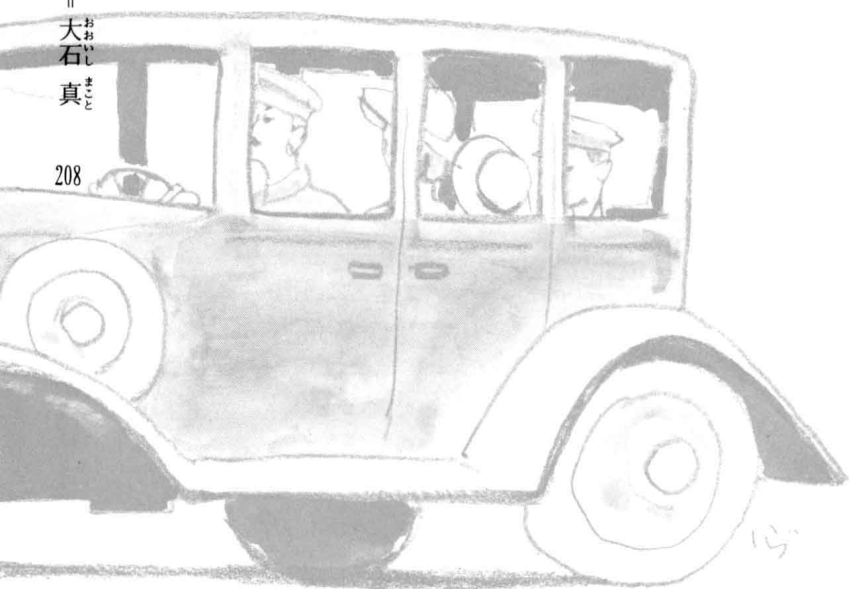
かぼちや戦争／もくじ

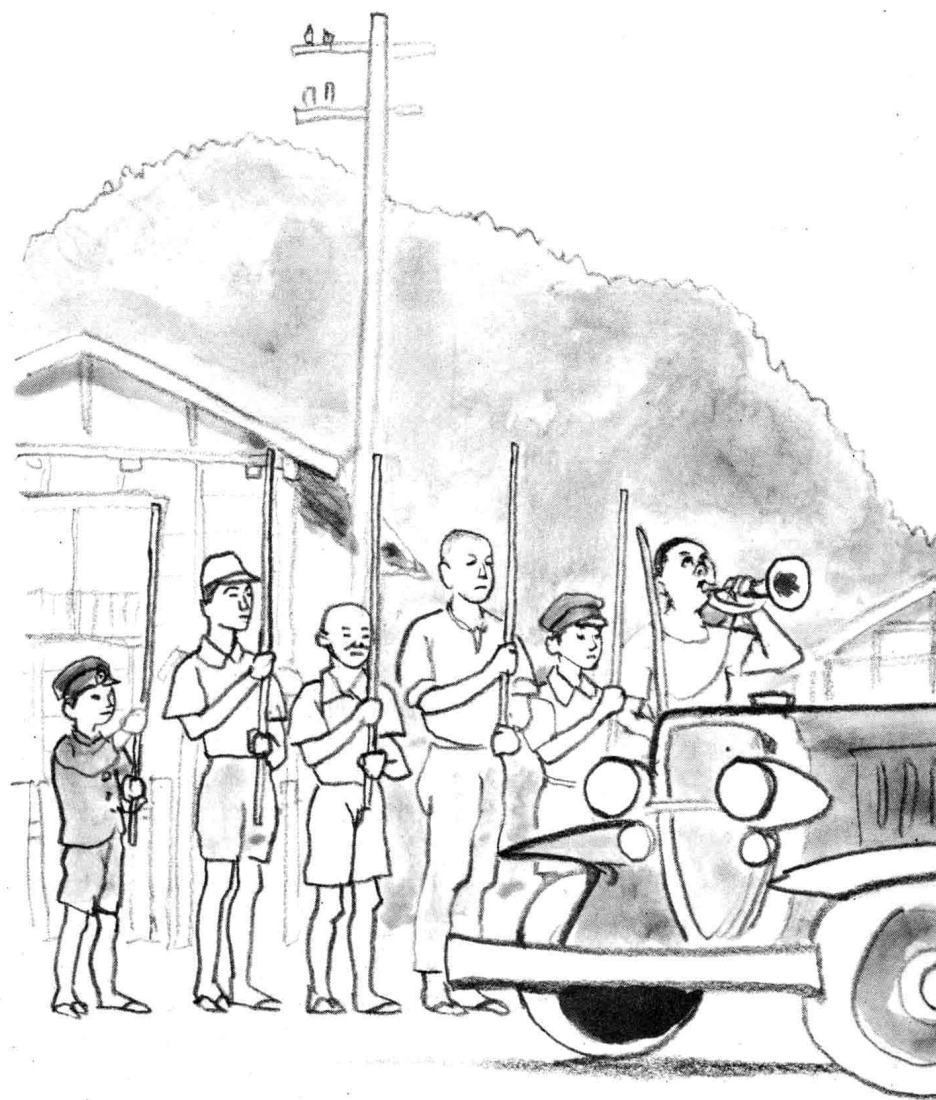
1	豆沢少年団 まめざわしょうねんだん	8
2	国夫とユカリ くにお	26
3	奉安殿 ほうあんてん	45
4	団旗 だんき	61
5	白いシャツ	88
6	かんづめ	112
7	かぼちやの花	129
8	スパイ	147
9	暑い日 あつひ	166
10	トンネル	182

戦争の被害者としての子どもたち〈解説〉

|| 大石真
おおいし まこと

208





作者・はま みつを

1933 年，長野県に生まれる。信州大学教育学部修了。現在，日本児童文学者協会会員，信州児童文学会「とうげの旗」同人。主な作品『北をさす星』（信州児童文学会賞），『わが母の肖像』『防人のうた』『一番星よまたたけ』『先生の赤ちゃん』『春よこい』（赤い鳥文学賞）など。住所／長野県塩尻市片丘区北熊井

画家・石津博典（いしづ ひろすけ）

1915 年，大阪に生まれる。日本美術家連盟・日本水彩画会会員，出版美術家連盟理事。図鑑・絵本に活躍し，主な作品は『日本の国のできるまで』『化石動物記』『もりのいのち』『たんぽぽみつけた』『米の来た道』『うめ』など多数。住所／東京都世田谷区松原2-2-18

か
ぼ
ち
や
戦
争

は
ま
み
つ
を



Ⅰ 豆 沢 少 年 団



トッテケ トッテケ チッテッタ

トッテケ トッテケ チッテッタ

秋男^{あきお}は、夢^{ゆめ}の中で、たしかにラッパの音をきいていた。けれど、まだとてもおきる気になれない。そこで、あたたかい布団^{ふたん}のおくへもぐりこむと、

「秋、ラッパが鳴ってるに、はやくおきる。軍人の子がなんだや。人におくれたら、わらいもんになるぞ。」

と、婆^{ばば}に布団をはがれてしまった。

秋男はしぶしぶ身じたくをすると、くぐり戸をあけ外に出た。そして、四つ辻^{つじ}にかけてみると、そこにはまだ団長^{だんちやう}の亀次郎^{かめじろう}しかきていなかった。

亀次郎は、秋男を見るとにとわらい、一番にきたはうびにラッパをふかせてやってもいいといった。まだねむくてそんな気にならんとことわると、そんなら昭平^{しやうへい}が持つてくるザラメをわけてくれると

いった。

亀次郎は、金色したラッパをそで口でなんどもこすると、にぎびのふき出た顔をふくらませ、またいせいよくラッパを鳴らした。ラッパの音は、まだ寝しずまってことりともしない村をつきぬけ、星がのこる空にきえた。

すると、霧の中からひとりふたりと、とび出た団員たちが、いっせいに亀次郎をめがけてかけよってきた。

「おそい、おそいぞ！」

亀次郎は、腰の木刀をひっこぬくと、ようやくならんだ団員のけつをおもいきりぶったいた。「そんなこといったって、まだ一番鶏鳴かねえぞ。」

武志がぶつくさいうと、亀次郎はけつのラッパをばかばかにはねあげ、かけよりざま武志のよこつづらを二、三発なぐりつけた。

「てめえ、団長のおらにもんくいう気か。トリが鳴いたって鳴かねえったって、おらがラッパ鳴らしたらとんでこい。」

「それにしたって、はやすぎるわな。」

「なに！ この非常時に、ニワトリよかおそくおきるやつがあるか。」

亀次郎は、また武志をしたたかなぐると、手を腰にあて、団員のひとりひとりを見てまわった。

「安、ボタン！」

安雄はあわてて胸のボタンをかけなおした。

「一、へそ！」

洋一はズボンをずりあげ腹をかくした。

「昭、ザラメ！」

ことし、一年生になったばかりの昭平は、亀次郎にいわれ、あわててポケットから紙つつみを出した。

亀次郎は目をほそめ、紙つつみに舌をいれると、

「あめえ！」

と、ひと声はえてから、お守りのように胸のポケットにしまいこんでしまった。

「あしたは、一の番だぞ。いいか、わすれるなよ。」

亀次郎は、やさしい目つきで洋一にいった。

「しかたねえ。こうせん（麦こがし）でも持つてくるか。」

洋一は、チッと舌を鳴らした。

「よおし。けんど、塩はいれてくるなよ。さとうならいいけんど。」

「さとうなんてあるかい。」

「それもそうだな。おらとこにもねえもんな。てめえの家にあるわけがねえ。」

亀次郎は、しごくあっさりみとめると、もういちど団員をならばせ、こういった。

「いいか、うんまいもんがあつたら、まっさき団長のところへ持つてこい。それがおらたち豆沢少年団のきまりだでな。うらやましかつたらはやく団長になれ。いいもんだぞ、団長つてな。うんまいもん食えたり、ラッパふけたり。それに、長ぐつだつてはけるもんな。」

そこで、草ぼうきをかついだ豆沢少年団員は、長ぐつをはいた亀次郎を先頭に、おいっちにおいっちに行進にうつった。

お宮の鳥居が見えてくると、亀次郎はのどをしめあげるしよっぱい声で、

「歩チヨウ……トレ！」

と、号令をかけた。そして、口にラッパをすいつけると、

“トテトテ チッテケテ

トテトテ チッテケテ”

と、かるい調子でふき鳴らした。

みんなも、ぞうりばきの足を高くあげ、しめった道をふみつけながら鳥居をくぐった。

亀次郎は、拝殿のまえに団員たちをならばせると、自分は一步まえにすすんでかしわ手を打ち、東にむかい、

「天皇陛下、バンザーイ！」

と、さげんだ。

あとにつづいて団員たちも、ようやく明るくなりだした東の空に、ばんざいをくりかえした。

「どうだ、一番乗りってないもんずら。まだ小丸山も、いちばんちかい宮北のやつらだつてき
ていねえ。豆沢が一番だ。これもみんな団長がしっかりしているからだよな。」

亀次郎はひとりではしゃいで、みんなにあいづちをもとめた。

「ばかめ。夜中にくりやあ、だれだって一番になるわな。」

武志がよこをむいていうと、亀次郎は目のいろをかえ、長ぐつのさきでおもいきり武志のすね
をけりあげた。

「この野郎！ いちいちおらにもんくつけやがって。ことしからこのおらが団長だぞ。団長にた
てつたあ、とんでもねえやつだ。このだいこん野郎め。」

亀次郎は、おちようしにのって、また武志をなぐりつけようとしたが、少年団の中でいちばん
でっかく、いちばんくそ力のある武志が、ほんきになって身がまえたのでやめてしまった。

「なにが団長だ。このうすらばかめ！」

武志はことし、副団長になり、ようやくラッパがふけるとよろこんでいたのに、亀次郎がラッ
パをはなさないものだから、なにかにつけてつかかるのだ。亀次郎はじめは武志をラッパ手

にするつもりでいたらしいが、へのような武志なけしのラッパをきいたとたん、わたさなくなった。

「そんな音をだされたんじやあまめざわしやうねんだん豆沢少年団のはじになる。見ろ、だいこんばっか食くってるもんで腹はらに力がへえらねえだに。」

亀次郎かめじろうにからかわれた武志は、

「おらだって、すぎでだいこんばっか食くっているんじやねえわい。だいこんしか食くうものねえもん、しょうがねえじやねえか。うんとならうで、きまりどおり、おらにふかせろ。」と、たのんだが、

「だめだ。ラッパがだいこんくさくさくなっていけねえ。」

と、亀次郎はいっかな承知しょうちしなかった。それでも武志はあきらめず、

「なら、だいこん食くわねえようにしりやあいいずら。」

「てめえの家でだいこん食くわなきや、なに食くえるだ。」

「いもを食くう。いもならいいずら。」

「ばかこけ。それこそへしか出でんぞ。」

「なら、かぼちゃ食くう……」

「なにお！ かぼちゃだと。てめえ、ほんきでいつてるだか。」

「それだって、ほかに食くうもなねえもん……」

「この野郎！ 副団長のくせに、てめえがそんなことだでかぼちや戦争に負けるだぞ。はじを知れ、はじを。」

そのとき亀次郎は、青すじをたて武志をなぐった。

学校では毎年、それぞれの少年団ごとにかぼちやをつくらせ競争させていた。九月もおわりころになると、かごいっぱいのかぼちやを荷車につんで学校にはこびこむ。荷車にかごひとつの少年団、ふたつの少年団、あるいは二台三台の荷車にかぼちやをつんでくる少年団とちがいはあっても、それらが校庭いっぱいにならび、校長先生から訓辞をうけるさまは、まるで戦車隊のようにいさましかった。

「皇国の興廃は、まさにこのかぼちや戦争にかかっているのであります。諸君らのつくったこのかぼちやが弾丸となって、敵のどてっ腹をぶちぬき、やがて勝利をもたらしてくれるのであります。ありがとう、ありがとう。」

どうしてかぼちやが鉄砲の弾丸になるのか、そのところがわからなかったけれど、あのかぼちやたちは輸送船に乗って南の島までいくのだという。もし、とちゅうで敵潜水艦にやられてもかぼちやはぶかぶか黒潮に乗って、ひとりで南の島にながれつき兵隊さんたちの食糧になる。だで、なにがなんでもかぼちやをつくれと、それぞれの少年団は競争でかぼちやづくりにはげんでいた。

